ルイジンニョ少年

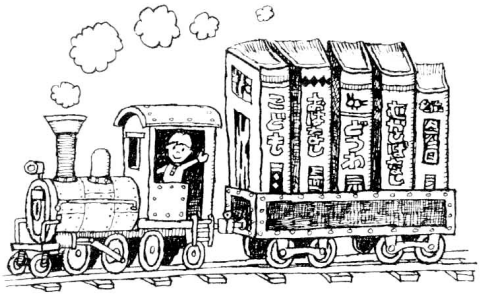
ブラジルをたずねて



かどのえいこ文

福原幸男絵

需要生长请访问 www.ertongbook.com



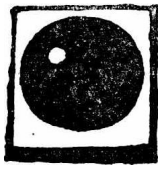
ポプラ社の少年文庫 1

ルイジンニョ少年

ブラジルをたずねて

かどのえいこ　文
福原幸男　絵

ポプラ社



検印廃止

ルイジンニョ少年　ポプラ社の少年文庫 1 …… 定価 500 円

≪ブラジルをたずねて≫

N.D.C. 296

発　行　昭和45年1月30日©.

著　者　かどのえいこ

発行者　久保田忠夫

印刷　新興印刷製本株式会社

製本　富士製本株式会社

■発行所 …… 株式会社 **ポプラ社**

〒160 東京都新宿区須賀町5　振替東京149271

落丁，乱丁本がありましたら，いつでもおとりかえいたします。

8025—062001—7764

ともだちの哲ちゃんは、

「ここ、ここは地球なんだ。」

といって、トントンと地面をならしました。

「ぼく、地球の上に立ってるんだ。でっかい、まあるい地球の上に。いまに世界はひとつの国になっちゃうよ。日本は地球国、日本県。そしたら、ゆかいだね。」

ゆかいも、ゆかい。わたしはワーッとかけだして、はんたいがわのブラジルまで、もういちどいってきたい気もちになりました。





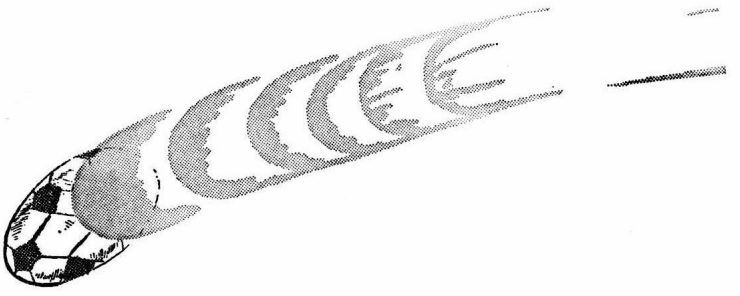
もくじ

1　三つの海をこえてブラジルへ……6

2　アマラルさん一家のおひるごはん……20

3　ブラジルのおどりサンバ……36

需要全本请访问 www.ertongbook.com



4 サンパウロの町……48
5 ルイジンニョのらくだい事件……64
6 おしおき……82
7 青空市場＝フェイラ……95
8 みんなのカルナバル……108
ブラジルについて……120
あとがき……123





♣文をかいた人

かどのえいこ

1960年に，東南アジアからアフリカをまわって，ブラジルで２年間生活しました。それからヨーロッパ9000キロを自動車旅行。現在，一児のおかあさんです。
1935年東京に生まれ，早稲田大学教育学部，英語英文学科を卒業しました。

♣絵をかいた人

福原幸男

小さいころから童話をかきたいと思っていました。その夢がかなえられて，子どもの本の仕事もしています。一拡デザイン社に所属しています。
1945年新潟県に生まれ，長岡工芸高校を卒業して，デザイナーについてグラフィックデザインを学びました。

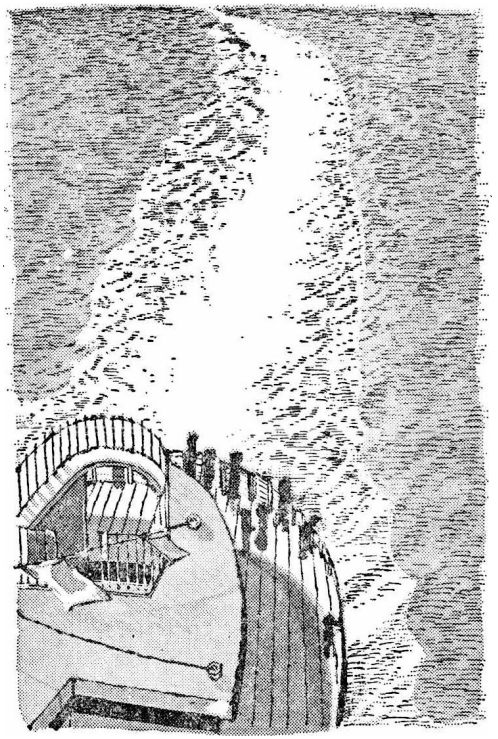
ポプラ社の少年文庫 1

ルイジンニョ少年

≪ブラジルをたずねて≫



かどのえいこ 文
福原幸男 絵



1

三つの海をこえて

ブラジルへ

ドウ　ドウ　ドウ　ドウ

船の音はどうしてこういつもおんなじなんだろう。たまには、ドウポン　ポンとか、ドウ　ドドウドゥとなってくれたらいいのに。それから、ときどき、よたよたとはしってくれたりしたら、どんなにかおもしろいのに。それがサービスというもんじゃありませんか。なにしろ、おきゃくさんを三百人からのせているのだから。

船のとおったあとには、ソーダ水のあわみたいな、ブクブクした白いしっぽが、一直線に、とおく空と海とがいっしょになる水平線までつづいていました。わたしはそのは

るかさきの東の国、日本からやってきたのです。

名まえは、かどのえいこ、二十三さい、これから商業デザインの勉強をしたり、じっさいに仕事をするために、ブラジルにむかうとちゅうで、いまは、大西洋にうかぶこの船の上にいるというわけなのです。

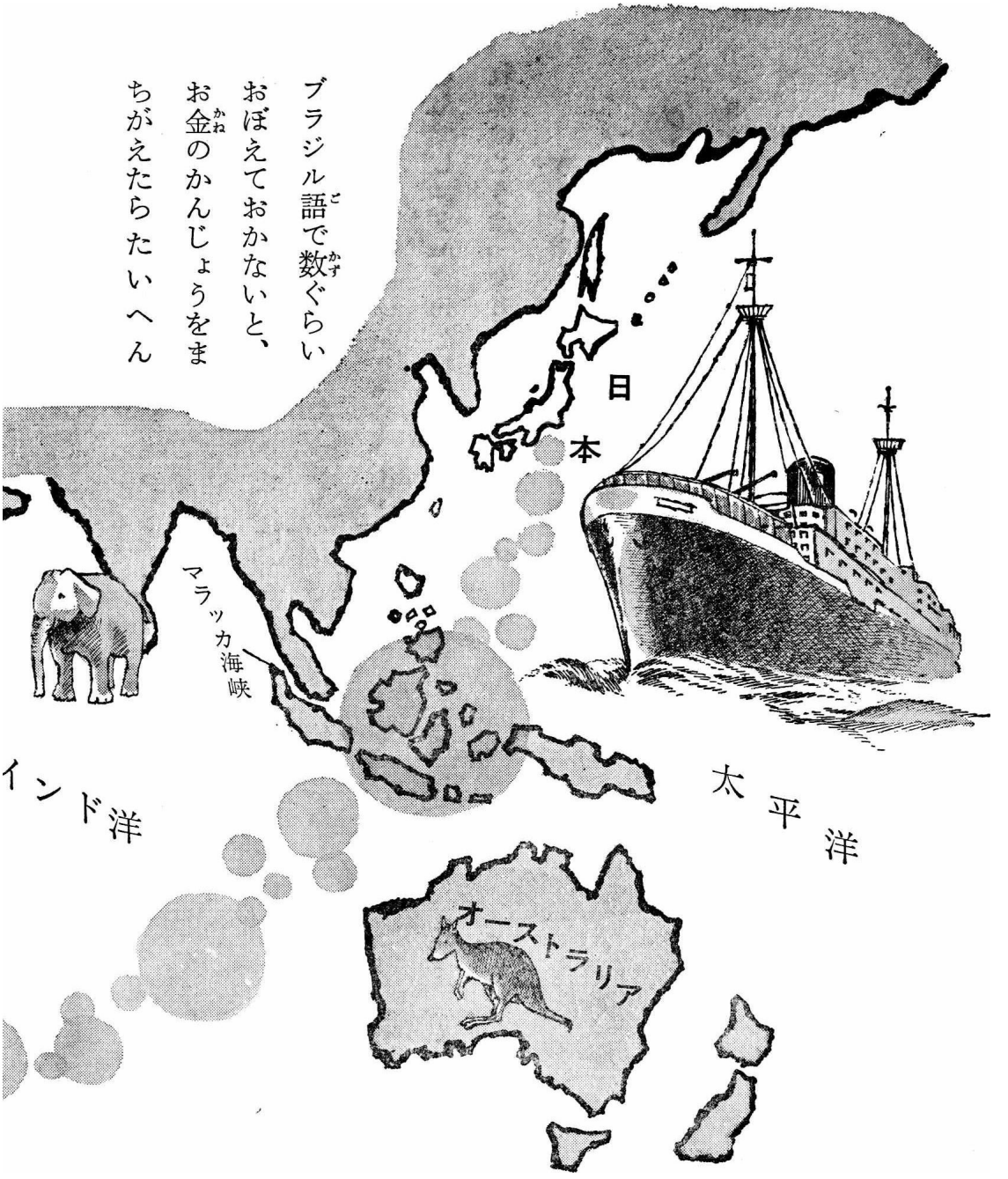
あきれるほど海ばかりです。大きくって、青くって、いったいブラジルなんて国があるんでしょうか。わたしはポケットから手帳をだしてみました。もう七かいめです。それにはこうはっきりと書いてあります。

下宿さき

ブラジル国、サンパウロ市、グァイアナーゼス通り八十一、ガラニアパート十一かい、インドゥ＝アマラルさん

インドウなんてへんな名まえ。外人におおいトムでもなければ、メアリでもないのです。ひょっとするとインディオ（原地人、アメリカのインディアンのような人たち）かもしれません。わたしが読んだ本には、ほんとうのブラジル人はインディオであると書いてあったのです。もしそうだったら、わたしはまずウマにのることをおしえてもらおう。いくらアパートにすんでいたって、インディオだったらそのくらいのことわすれているはずがないもの。それにしても、

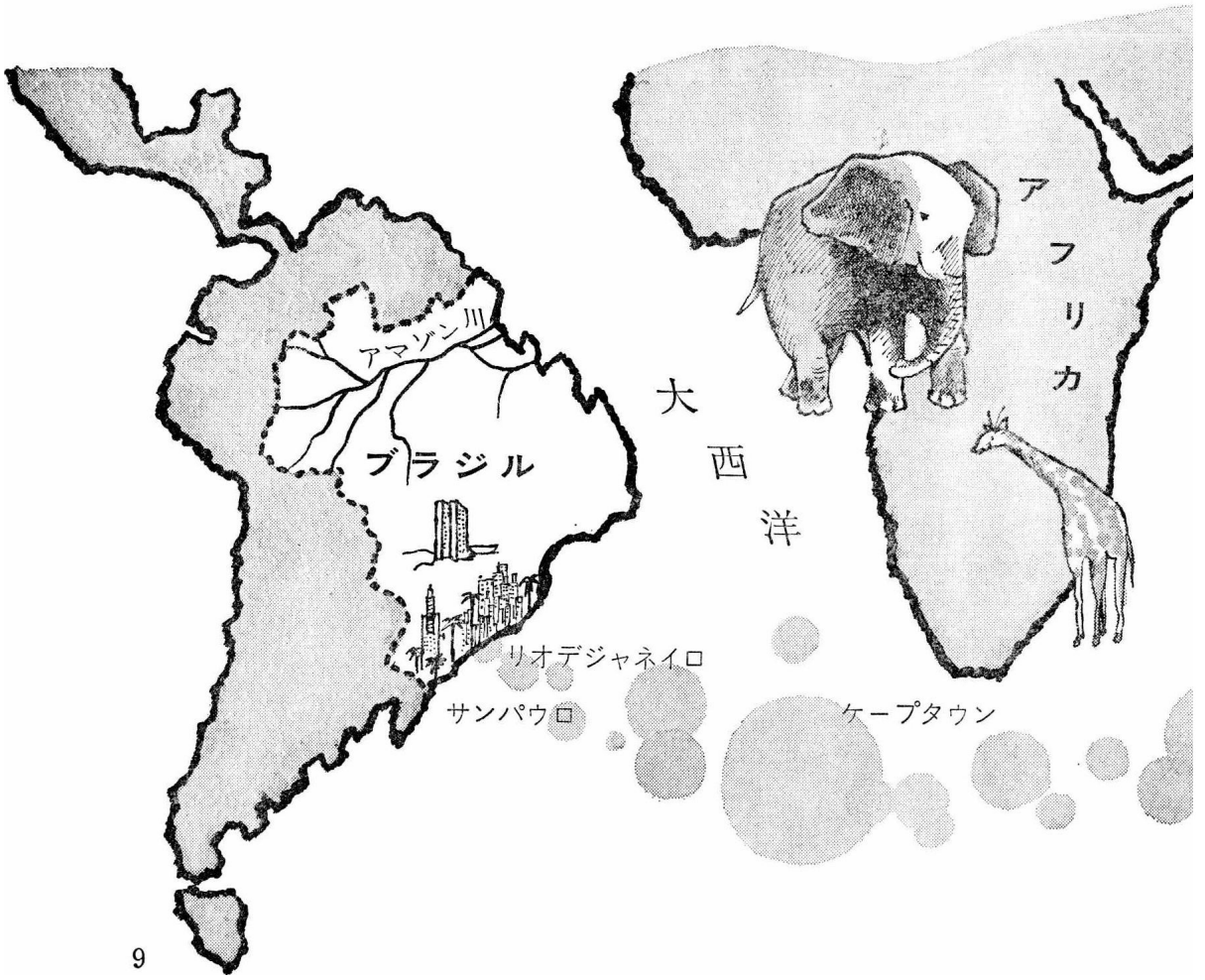
ブラジル語で数ぐらい
おぼえておかないと、
お金のかんじょうをま
ちがえたらたいへん



需要全本请访问 www.ertongbook.com

だ。ウン、ドイス、トレース、百がミルで、千がセン、おっと、ちがった。百がセンで、千がミルだったっけ。

日本をたってから、五十三日、太平洋をこえ、マラッカ海きょうをとおってインド洋、それから、アフリカのいちばん南、ケープタウンをまわって、大西洋のまん中で、わたしはすこしたいくつしてしまいました。



「かどのさん、そうだ室を見学させてくれるそうですよ。」

となりのへやの中川さんがしらせにきてくれました。そうだ室というのは船の運転台のあるへやのことです。わたしはいさんで甲板をよこぎり、ゆれるかいだんを一歩、一歩のぼって、船のいちばんまえの、いちばん高いところにある、ガラスにかこまれたそうだ室にはいっていきました。白いラッパズボンの水夫が、がっちりしたまるい木のかじをにぎって立っていました。そばの大きなつくえに海図（海の深さ、海流の方向など航海するのにひつようなことをしるした図）をひろげて、船員がコンパスでしるしをつけていました。

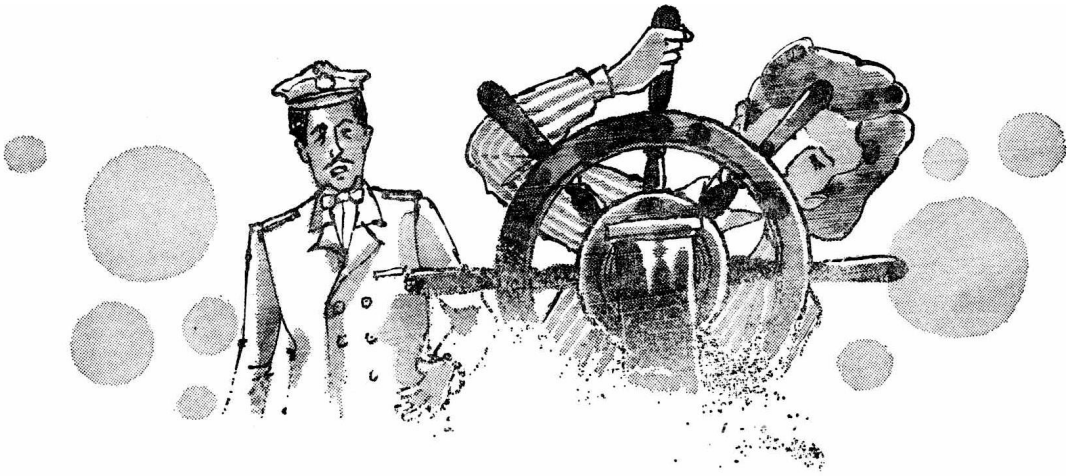
「ちょっと、ためしにかじをもってみるかい。」

と、水夫がいいました。

「え！」

はくじょうしてしまうと、戦争のとき、子どもだったわたしは、女スパイになりたいと思っていました。女スパイがだめなときは、女かいぞくになるつもりだったのです。だから、このとき、「しめた！」とさけんだわたしの気もちもわかっていただけるでしょう。

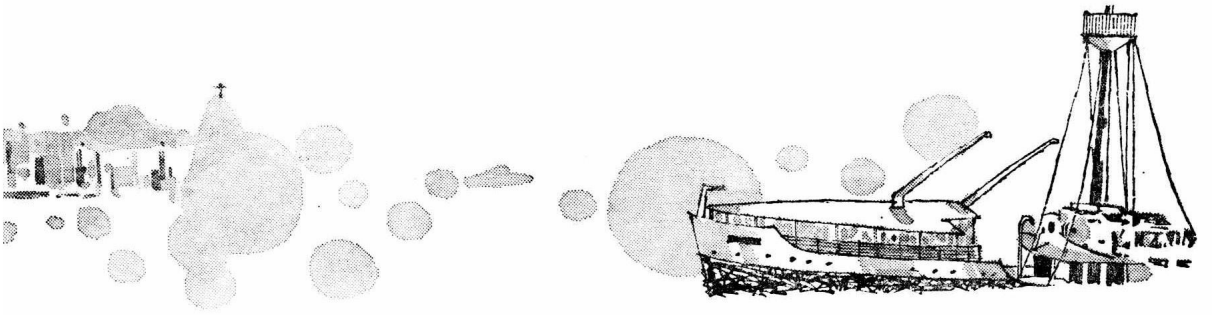
さあ、わくわくしてきました。わたしの手にビューンと船の力がつたわってきまし



た。このオランダ船チチャレンガ号、一七〇〇〇トンの運命は、いまや、わたしの手ににぎられているのです。ちょっと、北のほうにうごかして、ニューヨークにいこうか、それとも宝島にしようかな。

わたしは力いっぱいかじをにぎり、まえをにらみつけました。大きな、広い海を、船はまるではさみできりこむようにすすんでいきます。しずかな、みどりの海から高くしぶきがあがって、船のはなさきをけとばしては、おちていきました。水平線がぐぐうっともりあがって船はすっぽり水の中。あっ、とあわてたしゅんかん、ふわあっとうきあがって、あとにはまっさおな大空。太陽がぐるぐるまわりながらしずみはじめました。

なんて大きな海でしょう。なんておちついてい



る海なんでしょう。このとき、どうしてもとめようのない、むらむらとしたものが、わたしの心の中をあばれはじめました。

「そうだ！　いまだ！」

そっと、水夫の顔をよこ目でながめてから、だまって、まんしんの力をこめて、かじをぐいっと右にまわしました。わあ、たいへん、あせでかじがつるりとすべって、カラカラとまわりだしてしまったのです。

「おっととと、南極へでもいくつもりかい。」

水夫があわてて、とんできました。宝島行きは、みごとしっぱい。わたしはものもいわずに、船のうしろまでとんでもどり、甲板からのりだしてみると、あの白いしっぽはくねりともまがっていません。どこにも、わたしが運転したというしょうこがないのです。がっかり。船はあいかわらず、ドウドゥといいながら、それでもすすんでいるようでした。

日本をたってから、五十九日めの朝でした。

「リオが見えたぞー、リオデジャネイロが見えたぞー。」



というさけび声が、船の中をはしっていきました。甲板にとびだしたわたしの目に、とうだいの光がキラリ、その前方に、ブラジルのはじが見えてきました。

「とうとう、つきましたな。これからがたいへんだ。がんばらにゃ。」

青森からきた鈴木さんは、五さいになる宏ちゃんをぎゅっとだきしめながら、ちょっと、こわい顔していいました。

「わたし、二年やって、だめだったら、オーストラリアにいくつもり、中国人どこにいくのもへいきよ。」

と、ホンコンからのってきた、黄さんは元気にはなしています。

そばのベンチには、どこからきたのかわからない、白系ロシアのおじいさんがひとり、ぽつんとすわっていました。この船にのって、はるばるブラジルまでやってきた人たちはみんな移民です。これからこの国であたらしい生活をはじめようとしている人たちなのです。はじめて見るブラジルはしんせつそうな顔をしているでしょうか。やっと目的の国についたというれしい顔の下から、しんぱいそうな目がさぐるように陸

地の近づいてくるのをみつめていました。

船はグァナバラ湾をよこぎると、しずかに、がんぺきにすりよっていきました。いかりがなげこまれ、いつもいつもきこえていた機械の音がぱたりととまりました。二、三人の人がタラップをかけあがってくると、ブラジル語がポンポンときこえてきました。

「あしたは、サントスですよ。もうおわかれですね。」

と、中国人のパーサー陳さんがいいました。日本からみれば、地球のうらがわの国、ブラジルにとうとう、上陸するのです。

そのつぎの夜、サントス湾のくらやみの中で、わたしはたったひとりぽっちになってしまいました。じぶんの家のように思っていたチチャレンガ号も、ボーッとひとこえあげて、アルゼンチンへと出発してしまいました。

「さようなら、かどのさん、お元気でね。」

みんな口ぐちに声をかけあって、アマゾンのジャングルやパラナのかいたく地へと、むかえの車にのっていってしまいました。ところが、このわたしには、むかえてくれる人もいないのです。

需要全本请访问 www.ertongbook.com